

## 定性効果とthere構文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00005662">https://doi.org/10.14945/00005662</a>

# 定性効果と there構文

Definite Effect and There Constructions

内 田 恵  
Megumi UCHIDA

（平成22年10月6日受理）

## 0. はじめに

英語では名詞の前に語句を添えるかどうかを常に意識しなければならない。そして名詞を核とすると、このような語句は、なんらかの形で後続する名詞を修飾することになる。これを前位修飾と呼ぶ。ここで言う「修飾」という語の中身は広範囲に渡り、説明、制約、付加などと細分化される。

前位修飾の1つとして、英語の冠詞は名詞に対する制約や説明を加えるコンパクトな手段である。冠詞の形態は、不定冠詞 a/an および定冠詞 the で具現化される。

本稿は、英語の冠詞の選択が後続の名詞句にどのように影響するかという点を前半で考察し、さらに後半で冠詞との関係が問題になる there構文の特徴について、もう少し詳細に分析してみる。

## 1. 不定冠詞の2つの用法

不定冠詞 a/an には以下2つの用法がある。

### (1) ①特定のものを意識する

- 1) ある一定の文脈では、この用法は特定物を指す代名詞 it で受けることが可能：

Bill wants a bicycle. I will buy it / \*one next week.

- 2) 「～というもの」の意味を表す定冠詞 the の総称用法に重なる：

A mansion is a very BIG house!

### ②特定のものを意識しない

- 1) 「1つ」の意味を表す：

I have lived here for about a year.

- 2) 「同じ」の意味を表す：

Birds of a feather flock together.

- 3) 「ある～」の意味を示す：

The rumor is true in a sense.

- 4) 「～につき」の意味を示す：

He came back home twice a month.

5) 「一定量」の意味を熟語の一部として示す：

Take a look at these pictures.

(1) で見たような用法が一度に複数現れている例もある。

(2) That's a life-size model of a gorilla in a zoo.

a life-size modelは「1つの」、a gorillaは「ゴリラという動物」(総称用法)、a zooは「ある動物園」というように分類される。

## 2. 名詞の意味と冠詞

日本語は、名詞の前に冠詞に相当する語があってもなくてもよく、また単数・複数の区別があいまいな言語である。これに対して英語では、冠詞の使い分けや、名詞語尾の複数形変化は、その名詞の特徴を反映させる重要な表現法と言える。つまり、名詞の前に定冠詞、不定冠詞、無冠詞のどれを選択するかは、名詞そのものの性質と、構文中でその名詞句がどのような性格付けで使われているかということと深い関係がある。

例えば「なぜ playの後にスポーツ名がくると無冠詞で、演奏楽器の場合はtheが付くのか」というよくある質問について検討してみよう。

(3) He plays basketball.

(4) He plays the guitar.

(5) Are you a basketball fan?

(6) We played a video game together.

(3)の例で、もしも物質名詞であるbasketball (バスケットボール) がa basketballのように可算名詞になると、「バスケットボールで使う球」という普通名詞の意味に変化するので、play a basketballと言うことはできない。ただし(5)の a basketball fanでは、不定冠詞 a は名詞fanとの結びつきが強いので、basketballは「バスケットボールの」という形容詞の機能を果たしている。

これに対して、(4)における普通名詞としてのguitarには、「guitarを演奏すること」という行為まで含む意味はないと言える。すなわちguitarの前には、ギターという範疇を包括的に示している総称用法のtheが付き、一般化している。

ところで(6)では、gameの前に不定冠詞aが付いているのはなぜだろうか。それは「ゲーム」という範疇にはいろいろな種類があるが、その中の1つであるビデオゲーム」ということを強調していると考えられる。

さらに関係詞や分詞が後続している後置修飾型名詞句について、冠詞との関係を検討してみよう。この種の名詞句は定冠詞との相性がよいように見えるが、必ずしもそうではない。

- (7) a. I received a letter which was written in English.  
 b. It was a system that gave advantages to white people in South Africa.  
 (8) His father was a leader respected by many miners.

(7)の関係代名詞節や(8)の過去分詞が付いている例では、すべて先行詞である名詞には不定冠詞aが付いている。名詞に後置修飾語が付くときは、その名詞全体をまとめようとするために定冠詞を用いる場合と、「他とは違うのだ」という主張を前面に出すために不定冠詞を用いる場合がある。(7)と(8)では「1通の手紙」「1つの体制」「1人の指導者」というように、当該の名詞を他と区別して個別化しようとする性質が、定冠詞用法よりも優先されて用いられていると考えられる。このように名詞の前に付く語として、不定冠詞、定冠詞そして無冠詞からどれを選択するかは、名詞の性質や文脈などの使用状況までが影響していることがわかる。

ところで(7)や(8)のように定冠詞が現れると考えられる位置にも、実は不定冠詞も用いられることがあるという事実に対して、その反対の例がthere構文に見られる。

### 3. there構文の特徴

「～がある」、「～がいる」という日本語表現に対応する英語には、次のようなものがある。

- (9) a. A book is on the table.  
 b. There is a book on the table.

(9a)と(9b)はどちらも「存在」を表しているが、特に文頭にthereが現れる(9b)の文を「there構文 (there construction)」と呼ぶ。従来there構文には、定冠詞theを伴う名詞句は意味上の主語位置には現れないと言われる。また固有名詞や人称代名詞、this / that、these / those を伴う名詞句も(10a-c)のように現れないと分析された。さらに数量詞についても、all、both、each、every、mostなどを伴う名詞句は、次に示す(10d)や(10e)のようにthere構文には適さない。

- (10) a. There is {a / \*the / \*John's / \*his} cat in the room.  
 b. \*There are those cats in the room.  
 c. \*There is Bob in the room.  
 d. There are {\*all / \*both} pigs in the garden.  
 e. There is {\*each / \*every} dog in the house.

この理由は(11)のような「定性制限」と呼ばれる制約が働くからだとして従来は主張されている。

- (11) there構文の主語の位置にくる名詞句は、指示対象が特定されて、聞き手がその指示対象を了解している定名詞句であり、定名詞句はthere構文の意味上の主語にはならない。

しかし、定性制限は妥当ではないという主張が、多くの反例とともに、Ward & Birner(1995)や久野・高見(2004)で指摘されている。

- (12) a. There's the largest statue in the hole.  
 b. In England there was never the problem that was in America.  
 (Rando and Napoli 1978: 305)  
 c. There's the fountain pen to sign your name.  
 d. I won't feel lonely anyone, because I know there's still you.  
 e. A: I'm hungry. Is there anything to eat?  
 B: Well, there's the leftover chicken from last night.  
 f. A: I guess everybody is here now.  
 B: No, there's still John and Mary.  
 (e-f, 久野・高見 2004: 152)

(12a)は名詞句に最上級、(12b)は制限関係節、(12c)は不定詞の形容詞用法がそれぞれ続く例であり、いずれの場合にも名詞句に定冠詞theが付いていて、適格と判断される例である。また(12d)は、there構文の意味上の主語が代名詞youである。さらに(12e)や(12f)の会話では、定冠詞を伴うthe leftover chickenや固有名詞(John and Mary)も現れている。(12)の例がすべて適格であるという事実は、定冠詞を伴う名詞句や代名詞であっても、談話や文脈によって新情報を表わす場合があることを示している。したがって「定冠詞を伴う名詞句は旧情報を、不定冠詞を伴う名詞句は新情報を表す」という単純な区別は妥当ではないと久野・高見(2004)は指摘している。

また、there構文は冠詞の選択のほかに、存在を表現する他の構文とは異なる興味深い特徴を示す。(13)にまとめてみよう。

- (13) a. 動詞は「数の一致原則」に従い、後続する意味上の主語名詞句の単数または複数に呼応する。  
 b. (形式上の) 主語位置にthereが現れるが、特定の意味を持たない。  
 c. 疑問文、付加疑問文などにすると、thereが文全体の主語の特徴を示す。

ただし(13b)については、There's three cats in the room.のように意味上の主語が複数でも、単数の呼応を用いる場合が、くだけた文体などに見られる(久野・高見 2004)。

#### 4. there構文の成り立ち

次に、there構文の中の語句の配列は、名詞句の位置により、(14)と(15)のような2種類の型がある。なお([C(α)])はCの部分がある場合と、ない場合の両方を表す。(16)、(17)の例とともに見ておこう。

- (14) there + [A (動詞)] + [B (名詞句)] + ([C(α)])  
 (15) there + [A (動詞)] + [C(α)] + [B (名詞句)]  
 (16) a. There are many students in the university.  
 b. There is a Santa Claus.

(17) There came into the room a couple of police officers.

もっともよく見られるのは、(14)の[A]—[B]—[C]型であるが、(16a)のように[C]の部分に場所句がある文と、(16b)のように[C]がないものに分かれる。また、(15)の[A]—[C]—[B]型も使われていて、例えば(17)のような文があげられる。

さらにthere構文には、be動詞が使われる場合のほかに、いわゆる一般動詞の一部も現れるという事実がある。Milsark(1979)、Safir(1985)、鈴木・安井(1994)、高見・久野(2002)などを参考に、there構文に用いられる動詞のタイプ分けをしておこう。

- (18) a. be  
 b. dwell, exist, hang, lie, live, remain, reside, stand, survive  
 c. appear, approach, arise, begin, burst, come, develop, emerge, ensue, follow, grow, happen, loom, occur, open, return, take place  
 d. burn, run, smolder, swim, walk

まず(18a)はbe動詞である。また一般動詞のうち、(18b)は「存在」を表すグループであり、(18c)は「出現」を表す。さらに(18d)は、本来は「行為」を示す動詞だが、条件が整えばthere構文に用いられる。

そこで(18)の動詞群を参考に、まず4.1節ではbe動詞型のthere構文について、その成り立ちと意味を中心に見ていく。次に4.2節では、一般動詞を用いるタイプで、動詞の直後に名詞句がある(14)と、名詞句が文末にある(15)のタイプについて観察する。

#### 4.1 be動詞型there構文

Milsark (1979) では、be動詞型there構文を3種類に分類して、その特徴を分析している。

- (19) A <場所付き・所在付き (location) >  
 a. There is a fly in the mustard.  
 b. There are a lot of pretentious people in Cambridge.  
 B <存在的 (ontological) >  
 a. There is a Santa Claus.  
 b. There is a God.  
 C <迂言的 (periphrastic) >  
 a. There is a lot going on.  
 b. There are peasants murdered every day.  
 c. There are many people sick.

(19)における3種類の分類は意味に基づいているが、この分類は構造の違いも反映している点に注意しよう。まず(19A)のグループは、典型的なthere構文で(14)の型に属す。この顕著な特徴として、[C]の部分には場所を表す句が現れる。(19B)のグループは、(14)の型で[C]がないタイプである。3番目に(19C)は、(14)の型である点は(19A)と同じだが、[C]の部分には現在分

詞、過去分詞、形容詞などの要素がくるという特徴がある。

今度はbe動詞型there構文の成り立ちについて考えてみよう。be動詞型の典型と言われる(14)のタイプのthere構文では、there is (are) に後続する[B]と[C]の間に主述関係(主語とそれについて述べる述語の関係)が成立している。すなわち両者の間にbeを挿入すると、第2文型の文と解釈できる。生成文法では次の(20a)のように、(形式上の)主語位置に何もない形が最初にあると仮定する。

- (20) a. [ \_\_\_ is [ a book ] [ on the table ] ]  
 b. [ A book is [ ] [ on the table ] ]  
 c. [ There is [ a book ] [ on the table ] ]

そして(20a)の形に対して、意味上の主語a bookが(形式上の)主語位置に移動すれば、(20b)の存在文A book is on the table. (=1a) ができあがると考える。一方(20a)の形に対して、意味上の主語a bookはそのまま、空の(つまり形式上の)主語位置にthereが挿入されると、(20c)のthere構文There is a book on the table. という形になる。

次にthereが、意味上の主語ではなく、形式上の主語としての機能していることを見てみよう。

- (21) a. Is there a book on the table?  
 b. There was a key on the table, wasn't there / \*it ?

There is a book on the table. を疑問文にすると、(21a)のようにis とthereが入れ替わる。これは、例えばHe is a student. を疑問文にすると、主語のheと動詞isが入れ替わって、Is he a student?となることから、thereが主語であることを示している。また、There was a key on the table. に(21b)のように付加疑問の形をつけると、wasn't there ?となり、wasn't it ?とはならないので、この点もthereが主語であることを示している。これらの例は、thereがthere構文の形式上の主語であることを支持する証拠になる。しかし、there構文の動詞呼応の人称形態が、原則として後続する名詞句の単数か複数かに左右されるという事実は、there構文の特殊性を示している。

ところで(19)で示したbe動詞型there構文の中で、典型的な(19A)が、「ある場所に、ある人や物が存在する」ことを表すことは明らかである。(19B)は、(14)の型で[C]の部分がない場合である。この型のthere構文は、「名詞句で表される人・物が存在しているということのみを強調したい」という意図がある。そのために場所句は、一般的な了解事項や常識で判断できるので、省略されていると推測できる。その結果として新情報を表す名詞句が文末に配置されることとなる。

また(19C)は、(14)の[C]にあたる部分が、形容詞、現在分詞、過去分詞と多種におよぶ。特徴を順に見ておこう。

- (22) a. There was a student { sick / hungry / alert }.  
 b. There was a student { \*tall / \*beautiful / \*intelligent }.  
 c. There was a woman { tired / naked / drunk / clothed }.

(22)はすべて[C]の位置に形容詞が来る例であり、(22b)のような形容詞はthere構文に用いられない。sick, hungry, alertなどは、一時的状態を表すことから「段階レベル (stage level)」の形容詞と呼ばれ、tall, beautiful, intelligentなどの一定不変の状態を表す「個体レベル (individual level)」と呼ばれる形容詞と区別される。したがってthere構文は段階レベルの形容詞と用いられることができる。この特徴はさらに、(22c)のような段階レベルを表す(過去分詞が変化した)分詞形容詞も[C]に現れることが可能であるという事実も説明する。

#### 4.2 一般動詞型there構文

本節では(18)に示した動詞分類のうち、(18b)から(18d)までの一般動詞が現れるthere構文について分析してみよう。一般動詞型は2種類の型に分類される。すなわち、名詞句が(14)の型のように動詞の直後にあるthere構文は、「動詞句内型」と呼ばれ、名詞句が(15)の型のように動詞と離れて文末に位置するthere構文は、「動詞句外型」と呼ばれる。順に見ていこう。

まず(14)で示した there + [A (動詞)] + [B (名詞句)] + ([C (α)]) である動詞句内型は、be動詞型と語句の配列が類似しているのも、その成り立ちにも共通性がある。まずその成立過程を(23)と(24)を使って説明してみよう。

- (23) There appeared a monster in this town.  
 (24) a. [ \_\_\_\_ [ [ appeared [ a monster ] [ in this town ] ] ] ]  
 b. [ A monster [ [ appeared [ ] ] [ in this town ] ] ]  
 c. [ There appeared [ a monster ] [ in this town ] ]

(20a)と同様に(24a)では、主語の位置を空にしておくことができない。その解決策として、(24b)のように意味上の主語である a monster が移動するか、(24c)のように形式上の主語としてthereが挿入されるかの方法がある。ただし一般動詞が用いられる場合は、be動詞の場合と異なり[B]=[C]という関係は成り立たない。

次に動詞句内型に使われる動詞の意味と例を見てみよう。この型に用いられる動詞は、(18b, c)の動詞群のように「存在」や「出現」を表す動詞が多い。その中でも特に(25)から(26)のように、主語指示物である名詞句に意図性がないことを示すタイプの自動詞が多く用いられる。また(27)のように[C]の部分がない例も、非意図的な主語を持ち、存在か出現を表している。

- (25) a. There once lived a king who had no ears. (存在)  
 b. There stood an old grandfather clock in the hall opposite the front door. (存在)  
 (Lumsden 1988: 41)  
 (26) a. There has just appeared another book by Chomsky. (出現)

- b. There occurred a tragic event yesterday. (出現) (McCawley 1988: 84)
- (27) a. There exists many unicorns. (Milsark 1979: 181). (存在)
- b. There arose a storm. (Gueron 1980: 670) (出現)
- ((25)-(27): 高見・久野 2002: 35より再録)

ただし、(28)のように主語名詞句が意図的行為を表すような自動詞でも、動詞句内型there構文に用いられることが、高見・久野(2002:46)で指摘されている。

- (28) a. There once ruled a king who had no ears.
- b. Late at night, there crept a silent band of soldiers into the small mountain village.
- c. There raced two boys through the garden.
- (Johnson and Lappin: 29)

本節のここまでは動詞句内型を分析してきたが、次に(15)で示した名詞句が文末に置かれるthere構文であるthere + [A (動詞)] + [C ( $\alpha$ )] + [B (名詞句)]型(動詞句外型there構文)について、その成り立ちを考えてみよう。(29)は(30a)が元となり、次に(30b)のように、主語の名詞句が文末へ移動し、そして(30c)のようなthereの挿入が起こってできあがる。

- (29) Suddenly there ran out of the bushes a grizzly bear. (Aissen 1975:2)
- (30) a. [[ A grizzly bear] [ ran out of the bushes ]]
- b. [ [ [ ran out of the bushes][ a grizzly bear ]]]
- c. [ There [ [ ran out of the bushes][ a grizzly bear ]]]

be動詞型や動詞句内型とは異なり、動詞句外型は、元々主語の位置に名詞句があることが特徴と言える。(30b)で、どうして文末まで名詞句が移動されるのかというと、動詞句外型は談話の中へ新しい要素を提示する「提示文」の役割をはたすことが通例なので、新情報を担う名詞句を最も適している文末に配置していると思われる。

ついでながら動詞句外型there構文には、自動詞も他動詞も使われることを、以下の例で見ておこう。(31)は自動詞、(32)は他動詞が用いられている例である。

- (31) a. There came into the room a couple of police officers.
- b. There hung on the wall Mary' s favorite picture. (Milsark 1979: 155)
- (32) a. There crossed her mind a most horrible thought.
- b. There entered the room a sweet breath of air.

## 5. まとめと展望

本稿ではまず、冠詞の用法について考察した。定冠詞と不定冠詞の一般的用法をまとめていくと、冠詞と後続する名詞句の分布について、興味深いふるまいがあることがわかった。しかしここで問題として、旧情報を表すと言われる名詞句に付くとされる定冠詞theに対して、新

情報を表す名詞句に付く不定冠詞 a /an が対立軸として成立しているのかということが上げられた。この分布が成立しない例として関係詞節やthere構文があげられる。

そこで次にthere構文に絞って、その特徴を分析した。するとbe動詞型と2種類の一般動詞型のthere構文に分類されて、さまざまな相違点があることがわかった。両タイプのthere構文について、語句や配列の特徴を(33)のようにまとめられる。

- (33) a. there構文に用いられる動詞には、be動詞のほか一般動詞があり、自動詞の他に他動詞も用いられることがある。  
 b. there構文に現れる意味上の主語名詞句は、新情報を担うことが多いが、形態に対する制限はなく、冠詞も定・不定の両方が可能である。  
 c. 一般動詞が用いられるthere構文には、意味上の主語である名詞句が文末にくるものがある。

最後にthere構文の機能的性質について、高見・久野(2002)の主張を紹介する。次の(34)は、動詞句内型では非文と判定される構文を動詞句外型に配列を変更してみると、適格になる場合があるという例を示している。

- (34) a. \*There ran a grizzly bear out of the bushes.  
 b. There ran out of the bushes a grizzly bear. (高見・久野 2002: 51-52)

高見・久野(2002)は、これらの疑問の解明にはthere構文の持つ基本的機能が関係すると主張する。(34b)では、(14)や(15)のモデルに示した [C]の部分が、意味上の主語名詞句よりも前に位置している。それに対し[C]が文末に位置している場合は、(34a)のように非文となってしまう。[C]の部分は場所を表しているので、「(意味上の) 主語名詞句がthere構文内に登場する前に、その場面設定をした場合には適格になる」と分析して、(35)のような制約を提案している。

- (35) there構文は、意味上の主語の左側の要素が、話し手（または話し手が視点を置いている登場人物）にとって観察可能な存在か出現を表すと解釈される場合にのみ、適格となる。(高見・久野 2002: 60)

(35)に従えば、さらに(34b)では、ran out of the bushesがa grizzly bearの左にある。そこで場面設定がなされた上でa grizzly bear が現れるので適格文と予測されて、事実と一致する。このように高見・久野(2002)では、there構文が適格か否かは用いられる動詞の特徴により説明されるのではなく、意味上の主語名詞句を導入する環境が適切かどうか依存していると考えている。

\*本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）「日英語を中心とした情報構造上の概念についての多角的研究」（平成22～22年度、研究代表者：河村道彦、課題番号：20520436）の助成を受けて行われた研究の一部である。

#### 引用・参考文献

- Aissen, Judith (1975) Presentational there-insertion: a cyclic root transformation. *Chicago Linguistic Society* 11:1-14.
- Belletti, Adriana (1988) The Case of unaccusatives. *Linguistic Inquiry* 19:1-34.
- Birner, Betty J and Gregory Ward (1998) *Information status and noncanonical word order in English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian syntax: a government-binding approach*. Dordrecht: Reidel.
- Gueron, Jacqueline (1980) On syntax and semantics of pp extraposition. *Linguistic Inquiry* 11:637-78.
- 久野暲・高見健一 (2004) 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』東京:くろしお出版
- Lumsden, Michel (1988) *Existential Sentences; Their structures and meaning*. London: Croom Helm.
- Milsark, Gary L. (1979) *Existential Sentences in English*. New York: Garland.
- Rando, Emily and Donna J. Napoli (1978) Definites in there-sentences. *Language* 54:300-13..
- Stowell, Tim (1978) What was there before there was there? *Chicago Linguistic Society* 14:458-71.
- 鈴木英一・安井泉 (1994) 『動詞(現代の英文法8)』東京:研究社.
- 高見健一・久野暲 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京:研究社